

『死すべき定め』

2016年12月06日

米国ハーバード大学医学部教授で、外科医として多く人の最期に立ち会ったアトウール・ガワンデ氏が『死すべき定め 死にゆく人に何かできるか』を著している。米国で多く読まれているそうだが、日本語に翻訳されて、5ヶ月足らずで、8刷も増刷されている。

ガワンデ氏は出会った人々の実名をあげ、病名を記し、最期までの道程を丁寧に追っている。克明な取材で、生と死のあり様をリアルに伝えている。私の牧師としての経験に重なるところがあり、興味深く読んだ。触発されたことを踏まえ、私の思いを書きたい。

ガワンデ氏はインド人で、自分の家族のことからインド文化について書き始めている。インドでは高齢者を敬い、家族の篤い看病の中で死を迎える文化があったという。私は旧満州から引き揚げ、父の郷里の農村で育った。インドと同じく、老人は隠居しても敬われ、大所帯の家族の中で「家長」の座を占めていた。それは、仕事や人との関りで豊かな経験と知恵があったからである。ところが、時代が変わり、都市化によって核家族が多くなり、仕事も機械化し、人との関りも、かつてとは違って来た。昔の経験や知恵が役立たなくなり、孫に教えられるような状況になった。

今、医療が進み、食料事情が良くなり、長寿社会になって、仕事を辞めた後の年月が長いものになった。自立して、生きがいを持つために努力しなければならない。ボランティアや地域の活動などに積極的に関わらないと、日が持たない。今の私の立場がそうである。聖書を読み返すつもりで聖書講解と、思いつくままのことをホームページに書き、投書などもしている。アクセス数は少ないが、時々思わぬ感想を聞いて、嬉しく思うことがある。また、平和憲法を守ろうと「九条の会」に関わっている。メンバーは皆、熱心で誠実である。会話も愛情深い。時代の風潮は暗く、希望が持てないが、彼らとの市民運動には励まされ、楽しい。

退職後は、それぞれ工夫しながら生活しているが、いずれ、心と体をコントロールできなくなる状況になる。誰かに助けてもらわなければならない「障碍者」にならざるを得ない。誰にも避けられないことで、その時、「死すべき定め」にある自分を見つめることになる。ガワンデ氏は「諦めと孤独と絶望」の時であるという。急激に進歩した医学が、この時間を長くし、終末医療によって当人の意思と関わりなく、命はコントロールされる。質の高い生活（QOL）を望むが、満足できる解決策を見出していない。死を見つめ、苦悩が増幅する中、何を心に思うのか。精神科医キューブラー・ロス氏は死にゆく人々と対話して『死の瞬間』を著し、死の受容には「否認」「怒り」「抑鬱」「取引」「受容」の5段階があると分析した。ロス氏の著作は、死のタブーを破っての対話であったので、多くの人に読まれた。私は100人を超す死にゆく人と会話をし、見送ってきた。死の形は多様であり、死を超えた永遠を思う厳粛な時である。死にゆく人々は皆、必ずメッセージを残していく。日本人は、米国人ほどの葛藤はなく、死を受容していくのではないかと思っている。もちろん、心の奥底は見えない。臨終の人にこんな力があるのだろうかと思うほど、手を握り締められる。しかし、心を整え、死を受容していく。殊に、クリスチャンの場合、死後の神の国を望んでいるので、自分の人生を肯定し、感謝して逝かれる方が多い。むしろ、残された遺族の喪失感と悲しみの方が問題になる。人は死すべき定めを負っている。その定めはどう向き合うかが重大な課題である。「メメントモリ（死を覚えよ）」の心備えは大切で、終末医療についての希望を家族に伝えておくことである。